

老舗名	花藤 A組 6班
Q.1	江戸時代に花はどのように使われていたのですか。
A.1	江戸城の大奥や商家の方々が床の間に飾る生け花。商家の神棚に飾る御榊。仏事に飾るお花など。
Q.2	なぜ日本橋にお店を建てたのですか。
A.2	交通の要所に近く、越後屋などに代表される大店が沢山あった。また、築地本願寺に近く、大小様々なお寺が多かったため。江戸城の登城に使用される奥州街道、日光街道につながる本町通りに近い。江戸城に物資を運び込む常盤橋、神田橋、今川橋に近いことなどが挙げられます。
Q.3	災害からどうやってお店を守ってきたのですか。
A.3	関東大震災、東京大空襲により焼けてしまい、一時は千葉県の木下(キオロシ)に疎開しましたが、3代目が戦地より帰還し、家族や従業員と力を合わせて、日本橋に戻りお店を再開しました。
Q.4	時代毎にお客さんの変化はありますか。
A.4	江戸時代：江戸城大奥や商家などへの納品。榊や仏花の店舗売りや大八車での売り歩きなど。 明治時代～大正時代：店頭売りや宴会場への納品。 昭和時代～現在：店頭売り、企業、学校への納品。
Q.5	どんなお客さんが多いですか。会社と個人のどちらが多いですか。
A.5	日本銀行をはじめ日本を代表する大会社が多く所在している為、法人関係のお客が多いです。
Q.6	昔と今で売り方などどのような変化がありますか。
A.6	A4と同じですが、明治以降は特に、政府による欧州化政策の影響によりパーティーや宴会の卓上花が中心となりました。上野の精養軒や東洋軒などの老舗にもお届けしていました。昭和の戦後以降は、シーズンの限られる宴会花以外に、通年仕事となる法人関係の受付花、企業の華道部や茶道部の稽古花、学校関係の授業の納品などに営業形態を変化させていきました。現在は、法人関係でのご移転、ご就任、会社新設の贈答用のアレンジメントや胡蝶蘭のお届けが増えております。
Q.7	一番売れている商品は何ですか。
A.7	企業の方が贈答に使う胡蝶蘭、生花を活けたアレンジメントが多く売れています。また、個人のお客様では最近、お見舞い用の生花の持込みが禁止されている病院が多いので、生花を加工した水やり不要で花粉や香りの出ないブリザーブドフラワーが売れています。カーネーションを使用し、犬や猫などの動物を形作った、花藤オリジナルお花のぬいぐるみアレンジメントも安定した人気があります。最近始めました、きれいな箱の中にお花をコンパクトに活けたボックスフラワー
Q.8	花藤が独自で売っている売り方がありますか。
A.8	時代の変化に合わせ、ヨーロッパのデザインを取り入れつつも、日本橋のお客様の好みに合わせた「日本橋流」の上品なアレンジメントを手掛けております。支店などを出さず、お花は店頭で社長が直接見て、チェックが行き届くようにしています。また、法人関係のお客が多いので、社員の身だしなみ、接客態度もきちんとしたものを心掛けています。
Q.9	江戸前切り花は一般の花屋と何が違いますか。

A.9	季節の移り変わりをいち早く感じられるように、季節感のある枝物や花を多く取り扱っております。オフィス街で、お客様が季節の移り変わりを感じられる機会が少なくなっておりますので、花藤にご来店の際に、季節感を感じて頂けるようなディスプレイを心掛けています。
	Q.10 花の文化はこれからどのようなようになっていくと思いますか。
A.10	最近では輸入の花も多くなり、花の種類はますます多様化しております。花屋としても日々新しい商品知識を蓄えていく必要があります。住居も昔と様変わりし、床の間や畳の部屋が減り、室内に花を飾るスペースがなくなりつつあります。飾る花の形態も生け花ではなく、リビングや卓上に飾るアレンジメントが多くなってきております。また、オリンピックなども近づき、おもてなしや贈り物としての花の需要が伸びていくと思われま。